神戸大学人間発達環境学研究科・学術WEEKS
日韓交流セミナー

障害学生の「学び」から見る インクルーシヴな大学教育の意義と課題

日　時　2017年12月23日（土）10:00～16:30
場　所　神戸大学発達科学部大会議室
参加費　無料

話題提供者

ナム・ボラム（韓国ナザレ大学（卒））
金　英淑（韓国ナザレ大学（院））
禹　周亨（韓国ナザレ大学）
金丸　彰寿（神戸大学（院））
大山　正博（神戸大学（院））
稲原美苗（神戸大学）
河合　翔（日本学術振興会・大阪大学）

韓国ナザレ大学

忠清南道の天安市にある私立大学です。古くから障害学生支援に取り組んでおり、国内随一の先進校として国内外から注目を集めています。全学生の約7%が障害学生で、知的障害学生のための特別なコースが設置されている点でもユニークな大学です。

神戸大学人間発達環境学研究科と協定関係にあり、毎年活発な研究・教育交流を行っています。

「障害者差別解消法」成立を契機に、大学における障害学生支援の議論と実践に注目が集まっています。そんな中、神戸大学大学院人間発達環境学研究科は、障害学生支援の実績を積み重ねてきた韓国ナザレ大学と、障害のある学生の視点から大学教育を捉え直す共同研究を実施してきています。その成果のひとつとして、「障害学生の「学び」から見るインクルーシヴな大学教育の意義と課題」というタイトルの論文を日韓で共同執筆しました。この共同執筆論文は、韓国の障害学生が大学に受け入れられていった過程を、大学教育の変遷だけでなく当事者運動の視点などを交えて多角的に捉える試みも含んでいます。今回のセミナーは、その成果を土台として、さらに検討を進めるものです。登壇者は、この共同研究に携わった日韓の研究者です。

共同執筆論文の要約

本稿では、障害学生の大学生活全般の経験を「学び」としてとらえて、それを通して如何なる自己形成過程を辿ったのか分析し、インクルーシヴな大学教育の意義と課題について考察した。本稿は、韓国社会における障害学生支援の変遷及びナザレ大学の位置づけを整理し、それをもとに卒業生へのインタビュー調査を行うという日韓共同研究を方法として採用した。結果、韓国では、1990年代から障害学支援制度が確立し始め、2000年代半ばには、ナザレ大学で障害学生の権利保障を目指すインクルーシヴな大学教育が取り組まれ始めた。こうした発展期に、卒業生は大学に入学し様々な経験を通して、1）当初自分を否定的に見ていた姿から肯定的に受け入れる自己や、2）障害者、青年、女性、障害者の支援者としての自己を育んだ。この分析の結果、インクルーシヴな大学教育は、障害学生の自身のアイデンティティと関わる葛藤や他者との関わりの中で自己の使命や責任を感得する経験、青年としての発達課題への直面を自己形成過程の重要な「学び」の契機として保障することが意義として指摘され、他方、学生の進路保障が課題として示唆された。
（金丸彰寿、大山正博、川手さえ子、張主善、和田仁美、岩崎陽、塩田愛里、高寅慶、金明淑、金英淑、金榮喆、津田英二「障害学生の「学び」から見るインクルーシヴな大学教育の意義と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第10巻1号）

主催　神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター
（担当：津田英二　zda@kobe-u.ac.jp　TEL078-803-7972　FAX078-803-7971）